

山田 YAMADA GORO 五郎

Special edition "Up to me"

全力で「好き」になる

テレビで披露する博識な姿が印象的な山田五郎さん。その背景には、目の前にあるものを全力で好きになる、という仕事に向かう姿勢があった。

仕事とは 好きになって楽しむこと

私は美術や街歩きといった趣味性の強い分野の仕事が多いせいか、好きな仕事ができたらやまじいと言われることがたまにあります。悪い気はしません。が、実はやや心外でもあるんです。というのも、私自身は好きな仕事をやっているというより、頂いた仕事を好きになってきただけだと思っているからです。

好きなことは生まれつき決まっていたり偶然に出会ったりするものだと思います。でも、本当にそうでしょうか？ 苦手な食べ物を我慢して食べているうちに大好物になった、なんて話もよく聞きますよね。好きなことは、実は努力して作ることもできるんですよ。むしろ何もなくても好きになることの方が難しい。どこで出会えるかわからない好きな仕事を探すより、与えられた仕事を好きなことに変えていく方が、はるかに簡単かつ確実ではないでしょうか。

私にそう思わせてくれたのは、雑誌編集の仕事でした。どんなテーマを担当させられても、本気で好きにならなければ、読者に納得していただけるページは作れません。嫌いでもやるのが仕事だとよく言われますが、雑誌編集者の場合は好きになること自体が仕事なのです。実際、好きになろうと努力すれば、大概のことは好きになりました。好きになれば楽しくなるし、楽しくなれば

詳しくもなる。私がいろいろなことに詳しくそうに見えるとしたら、それは雑誌編集の仕事を通じていろいろなことを好きになり、楽しんできたからだと思っています。

雑誌編集に限らず、どんな仕事でも何らかのやり甲斐や面白みは絶対にあるはずなんです。だから好きになれないはずがない。仕事が好きになれないと悩んでいる方の話を聞くと、実は仕事そのものではなく人間関係や待遇に不満があることが少なくありません。それなら仕事自体を好きになって、同業他社に転職すればいい。人や組織は変えられなくても、自分を変えることはできるのですから。

最近の仕事よりプライベートを大切にしている人が増えていますが、その背景に「仕事は楽しくなくていい」という割り切りや諦めがあるとしたら残念です。仕事もプライベートも両方楽しい方がいいに決まっているではないですか。仕事は我慢するものではなく楽しむもの。そう考えた方が生産性も上がり、自分にとっても社会にとってもプラスになります。

オーストリア遊学で 西洋美術を体感

偉そうなことを言いましたが、要するに私の場合、自分の好きなことを見つけてようと思わず、単にその場の成り行きに流されて生きてきただけとも言えるでしょう。



山田 五郎(やまだ ごろう)

1958年、東京都出身。上智大学文学部卒業後、特講談社に入社。『Hot-Dog PRESS』編集長、総合編集局担当部長等を経てフリーに。現在は時計、西洋美術、街づくりなど、幅広い分野で講演、執筆活動を行っている。『知識ゼロからの西洋絵画入門』(幻冬舎)、『銀座のすし』(文藝春秋)、『闇の西洋絵画史(全10巻)』(創元社)、『機械式時計大全』(講談社)など著書多数。『出没!アド街ック天国』(テレビ東京)ほか、TV・ラジオにレギュラー出演中。

高校時代に『俺たちに明日はない』といったアメリカン・ニューシネマや『去年マリエンバートで』などスローヴォー・ロマン系と呼ばれた小難しいフランス映画が好きになったのも、仲間内で流行っていたから。その流れで、映画論の授業がある大学をいくつか受けて、たまたま受かった上智大学に進みました。

ところが一般教養で受講した「パロックの文化と芸術」という論議に影響されて、今度は西洋美術史に興味を湧いてきた。でも上智には美術史専門の学科がなかったもので、どうしたものかと担当教授に相談したら、本場に留学すればいいのではないかと勧められたんです。ちょうどその頃、オーストリアのザルツブルクにあるアメリカ系カレッジと上智が提携。そこで単位を取れば留年せず卒業できるということで、言われるままに1年間、留学というより遊学しました。

なぜ遊学かというと、行ったら行ったで向こうの先生に「美術史は作品の現物を見るのがいちばんの勉強だから」とヨーロッパ中の美術館や教会を見て回ることを勧められ、格安鉄道バスで旅行ばかりしていたから。ここでも言われたことに従っただけですが、結果としてすごく勉強になりました。

当時、東欧は共産圏でしたから西欧だけなのですが、それでも100以上の施設を訪れました。どの美術館もいまほど混んでおらず、毎日来る変な日本人は目立ってせいか、学芸員さんが声を掛けてくれて倉庫まで見せてもらったことも何度かあります。そうやって数えきれ

ないほどの作品を見ていくうちに、絵の善し悪しや真贋がなんとなくわかってきて、ますます美術が好きになりました。それで帰国後に美術書を出している出版社をいくつか受けたのですが、たまたま受かった講談社では雑誌編集部には配属されて……。それでも目の前の仕事を好きになっていくうちに、気がつけば自分が美術史の本を書いたりYouTubeで美術を語ったりするようになっていた、というわけです。

流されるままに生きてきた結果にすぎないとはいえ、今こうやって美術を語ることができているのも、遊学先の恩師に言われたままに数多くの作品を見てきたお陰。美術に限らず世の中には、数をこなさなければわからない、いわく言いがたい感覚があるんですよ。これは根性論でも気のせいでもなく、厳然たる事実だと思っています。

数をこなして 感覚を磨く

何年前かに『銀座百点』というタウン誌で、銀座の寿司の名店を取材して回りました。そのときに名人と呼ばれる方々が口をそろえて仰っていたのも、「握りは数をこなさないと上手くならない」。昔の職人さんは「つけ場」に立つ前に、裏で出前用の寿司をひたすら握らされたそうです。そうやって数をこなすうちに、米粒の数まで同じに握れるようになるのだと。

『タモリ倶楽部』という番組でネジの成功の母』なのです。成功は時の運もありますが、失敗には必ず原因がある。ならばその原因を明確にして繰り返さないよう努めれば、二度と同じ失敗はしないはず。ただし失敗の原因は人それぞれなので、他人の経験が参考になるとは限りません。あくまでも自分自身が失敗し、恥をかいて痛い思いをしなければ、実になる教訓は得られないでしょう。

人は成功より失敗から多くを学びます。そして若いうちの失敗は、比較的大目に見てもらえますし、取り返すことも容易です。歳を取ってから取り返すのつかない失敗をしたくないなら、若いうちにできるだけ失敗しておいたほうがいい。社会で成功している方の多くは、若い頃の手痛い失敗談をお持ちです。私の好きな古美術の世界でも、駄作や贋作をつかまされた数だけ目が肥えると言われています。

愚かさを笑われたって、いいじゃないですか。それもまた、若いうちにだけ許される特権です。私くらいの歳になると、変に気を遣われて、笑ってもらえなくなりやすから。その方がよほど辛いですよ。

もっとも、辛いからこそ同じ失敗を繰り返すまいと努力する気も起きるわけです。この歳になってもまだ失敗を糧に成長できるのは、むしろ幸せだと思います。いくつになっても失敗を恐れず挑戦していきたいですね。

英語も西洋美術も 敷居が高いはずがない

『オトナの教養講座』と銘打って西洋美術を紹介するYou Tubeの番組を配信しています。教養とか美術とかいうと堅苦しいお勉強のイメージがありますが、むしろ逆。どちらもいわば娯楽であって、無理に勉強するものではありません。

私は英語と美術をお勉強の対象にしてしまったことが、近代日本の大きな過ちの一つだと思っています。

英語はただの道具ですよ。日本人が英語ができない原因は、日本語の特殊性でもシャイな国民性でも教育の問題でもなく、単に使う必要がなかったから。これから国内市場が縮小して海外に出るしかなければ、嫌でも話すようになるでしょう。あるいは自分から好きで学ぶだけでも、普通に話せるようになるはず。英語圏では誰だって話せているわけで、頭の善し悪しは関係ない。下手に受験科目にして苦手意識を植え付けるから、できるものもできなくなってしまうのです。

一方、美術がお勉強になってしまった一因は、皮肉なことに美術館にあると思えます。美術館は一部の権力者が独占し

問屋さんを訪ねたとき、そこのご主人は実際に手の感覚だけで言われた数のネジを掴んで見せました。で、我々も挑戦してみたら、一時間ほど続けただけでも意外なほど上達できたんですよ。人間の感覚って、本当にすごいと思えましたね。

先端技術を支える東京の町工場を紹介するMXテレビの番組でも、何度も驚かされました。完璧につくられたはずの機械が、なぜか正常に動作しない。そのこと自体も不思議ですが、熟練の職人さんがちょっと手を加えただけで途端にうまく動き出すのは、まさに魔法のようでした。とをどうしたのか伺っても、大抵は「なんとなく」とか「勘だよ」としか返ってこない。語彙が乏しいわけではなく、そうとしか答えられないのです。数をこなすことで体で覚えた感覚は、数値化も言語化もできませんから。AIがどんなに進化しても、近似値しか得られない。

そのような数値化できない経験値は、ものづくりだけでなく、営業から美術鑑賞まで、どんな分野にもあるはず。IT化が進んでいろんなことが便利になる反面、実物に触れて数をこなす機会が減っていくのは、その点でちょっと心配ですね。